

検証 JR革マル浸透と組織私物化の実態！

民主化闘争情報[号外] 2010年10月14日 発行 日本鉄道労働組合連合会(JR連合)【No.158】

「解放」は黒田理論を否定！JR革マルが内部抗争を制圧か？

前々号で宗形明氏の著書を引用し、「1994年6月6日付革マル派機関紙『解放』(第1321号)は、無署名論文『労働運動の展開上の偏向について』を掲載し、“賃プロ魂注入主義一掃”を訴えた」と記載した。革マル派の党中央、黒田議長が提起した理論を全否定したというのは、JR内革マル派が内部抗争に勝利したと考えられ、その陰に松崎氏の存在を想起しないわけにはいかないだろう。この論文は「既製の労働運動をその内部からのりこえてゆくための闘い。つまり労働運動を左翼的におしすすめてゆく闘い、-これを、わが革命的左翼がおしすすめてゆくばあいにうみだされてきた偏向の典型は...」との書き出しで、党中央の「賃プロ魂注入主義」を全否定し、本情報「No.148」「No.149」で検証した「のりこえの論理」による労組への浸透の強化を主張しているようだ。ほんの一部を紹介する。

こうした萎靡(いび)沈滞しきった労働戦線の現状をラディカルに突破するためには、従来のような運動づくりのスタイルを抜本的にあらため、資本と直接的に対決し、「さし違える」という構えが必要であることが、一部の指導的メンバーによって一時的ではあれ提起された。...(中略)... 戦闘的労働者たちの一部が、いわゆる賃プロ魂注入主義に共感を覚えたほどであった。革命的マルクス主義の基本とはおよそ無縁なこのイデオロギーに、彼らは軽薄にも影響されたのであった。指導部内で組織討議もされずに、いやむしろこの討論を拒否して「私見」として提起されたほどのこの提起に、中央指導部は93年7月以降に、ようやく自己批判し組織内闘争を開始したのであった。たとえ一時的かつ部分的にはあれ、かの提起がただちに全面的批判の対象にされずに放置されたということは、指導的メンバーの思想性の脆弱さ・理論水準の低さ・政治的感覚の鈍磨・革命的気力の衰弱・精神的怠惰などにも関係しているといつてよい。

いわゆる賃プロ魂注入主義という季節はずれの誤りを、たとえ部分的にはあれ、まあ主義やなれあい主義として指弾されるような“大人のつきあい”のゆえに許容してしまったのは、おのれの内なす左翼組合主義にも関係があるのではないか、ということに思いを馳せることも必要ではなからうか。日本労働運動の現在の危機を突破してゆくの、まさにそのために、われわれは、われわれの過去のすべての諸教訓を現在において生かすのでなければならない。既存の組合内のもるもるのフラクションへの加入戦術の緻密化についての、また既存の組合内フラクションの換骨奪胎のためにわれわれが組織戦術を駆使してきたことについての諸経験を、まさに現代的に掘りおこしつつ教訓化し、かつ実際に適用してゆくことが大切である。

自己の職場において革命主義的な言動をやったのけることは、配転・首切りに直接つながるものでしかないだけでなく、組合員大衆の信頼を獲得することにはつながらない。労働組合運動の組織化についてのイロハをわきまえて諸活動を展開するばあいには左右の組合主義におちこみ、組合運動のイロハを無視する場合には革命主義に突進するなどということは、あきらかに共産主義者としての不断の自己形成をないがしろにしてきたことの証左でなくしてなんであろう。

党派性を隠した革マル派の組織浸透に警戒心を！

この主張こそ、政府が認める「将来の共産主義革命に備えるため、その組織拡大に重点を置き、周囲に警戒心を抱かせないよう党派性を隠して基幹産業の労働組合等各界各層への浸透を図っており」という革マル派の本質を表すものだ。JR内革マル派でも、こうした難解な論文の読書会を行ってきたというが、一般人には到底理解できない内容である。

「検証・JR革マル浸透と組織私物化の実態！」はJR連合ホームページに掲載中！ <http://homepage1.nifty.com/JR-RENGO>